

複式学級を見据えた学習スタイルの探究
～学び合う学習指導の工夫～

曾於市立月野小学校 教諭 森 慎一郎

目 次

1	研究主題設定について	1
2	子供の実態	1
	(1) 学習スタイルについての意識調査	
	(2) 学び合いについての意識調査	
3	研究仮説の設定	2
4	仮説を検証していった実践の紹介	2
	(1) 「学習スタイル」に関する【仮説】に基づいた実践	
	(2) 「学び合い」に関する【仮説】に基づいた実践	
5	成果と課題	7
6	最後に	8

〔参考文献〕

- | | | |
|-------------------------|----------|-------|
| ・『小学校学習指導要領解説 算数編』 | 文部科学省 | 平成29年 |
| ・『大隅学力向上リーフレット』 | 大隅教育事務所 | 令和2年 |
| ・『「曾於市学力向上プラン」家庭学習のすすめ』 | 曾於市教育委員会 | 平成28年 |

複式学級を見据えた学習スタイルの探究 ～学び合う学習指導の工夫～

1 研究主題設定について

十数年ぶりに3年生を担当をすることとなり、期待と不安に胸を膨らませながら子供たちとの学校生活が始まった。国語ではローマ字やことわざなどが4年生から移行し、消防や警察の仕事が社会科の学習に組み込まれ、理科では扱う植物が変わっているなど学習の変化に驚きを隠せなかった。

そのような折、本年度はへき地・小規模校教育連絡協議会（以後「へき連」で表記）の発表に当たり研究公開の機会を得ることができた。本校は6学年全て単式学級であるが、受け持っている3年生は人数の関係上、来年度複式学級になる可能性が非常に高くなっている。

そこでへき連の発表に合わせ、しかも複式学級が待っている子供たちにとって次年度スムーズに学習を進めていくための土台となる研究を進めていこうと考えたのである。

複式学級は大変であるが、学習スタイルが定着してくれば主体的な学習習慣が確立され、学力向上につながると個人的に確信する経験がよくあった。間接指導等が未知である本学級の子供に、これまでとは違う学習スタイルで経験値を積ませながら、学び合う学習指導を重ねることで学力の定着と向上を図ることにした。

2 子供の実態

研究を進めるに当たり、学習に関するアンケート調査を行った。

（対象児童 3年生 男子4人 女子5人 計9人）

(1) 学習スタイルについての意識調査

回答方法は「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4項目から選択する形式とした。

ア 新しい課題に挑戦する授業がよい。

とてもそう思う8人 どちらかといえばそう思う1人

イ 自分たちで考え、話し合う授業がよい。

とてもそう思う8人 どちらかといえばそう思う1人

ウ 授業中、課題が早く終わったり、先生が他の子供に教えているとき、どんなことをしていますか。もしくはしたいですか。（複数回答）

学習プリントに取り組む9人 タブレットのドリルをする9人 ドリルをする3人

(2) 学び合いについての意識調査

回答方法は「そうしている」「どちらかといえばそうしている」「どちらかといえばそうしていない」「そうしていない」の4項目から選択する形式とした。

ア 問題を解くとき、既習事項を生かしている。

そうしている9人

イ 説明をするとき、絵や図を使うようにしている。

そうしている8人 どちらかといえばそうしている1人

ウ 学習したことを生活の中で生かせないが考えている。

そうしている9人

回答形式を4段階に設定しているのので、調査結果から「学習スタイル」について意欲的な面が見えてきた。また、「学び合い」の意識調査からも概ね理想的な回答を得ることができた。

しかし、実際の授業の中では、新しい課題に対して活動が停滞したり、既習事項の活用を忘れていたり、難しい説明で時間を費やしたりすることがよくある。

そこで「学習スタイル」と「学び合い」に関する仮説を立て、具体的な方策を実施していくことで子供の成長へつなげていきたいと考えた。

3 研究仮説の設定

子供の実態を踏まえつつ、研究テーマに迫っていくために、以下の2つの仮説を立てることで成果を挙げることができるのではないかと考えた。

「学習スタイル」に関する【仮説】

学習意欲を高める指導を工夫することで、複式指導においても主体性をもち、自分から進んで学習に取り組む子供が育っていくのではないかと考えた。

複式指導を行う上で外すことができないのはガイドの育成である。そしていかに自主的に学習を進めていくかが大きなポイントとなってくる。子供たちにとってこれまでとは違う学習の進め方を説明し、理解させることにした。そして授業の中での実践化に努めることにした。

そうすることで単式学級においても直接指導と間接指導を体感でき、自主学習の力を付けていける場になるのではないかと考えたのである。

具体的取組として以下のようなことを計画した。

・学習ガイドの導入	・学習のパターン化
・構造的な板書設計	・個別学習の補助的手立て

「学び合い」に関する【仮説】

学び合いの向上を図ることで、教師の関わりを得なくても自主的に話し合い、意見をまとめようとする力が子供たちに育っていくのではないかと考えた。

複式指導において「練り合う」「まとめる」力の育成を重視されることがよくある。そこで学び合いの力をつけることで自主的に学習に取り組む学習習慣を確立させ、学力の定着や向上を図ることができるのではないかと考えた。

この仮説は、本校の研修においても課題として挙がってくることが多く、力を入れて研究していく必要性を強く感じた。

具体的取組として以下のようなことを計画した。

・話し合いのスキルアップ	・ノートを活用した学び合い
・ノート指導を意識した家庭学習の向上	・「振り返り」による締めくくり

上記の仮説を具体化する取組を展開していけば複式学級の学習スタイルを身に付けつつ、学力の定着・向上へとつながると信じ、研究を進めていった。

4 仮説を検証していった実践の紹介

(1) 「学習スタイル」に関する【仮説】に基づいた実践

ア 学習ガイドの導入

エ 個別学習の補助的手立て

複式指導を行う上で、教師がいなくて自分で学習する時間が生じてくる。前述したように「主体的な学習習慣が確立され、学力向上につながる」がこの時間に頼るところが大きい。他クラスの授業を参観させていただくとき、子供に待ちの姿勢が見られ、時間を空費していく様子を目にすることがある。実にもったいない時間である。

本学級はまだ単式学級ではあるが、学力に個人差があり個別指導を要する子供もいる。その際は、遅れている子供に直接指導を行い、課題が早く終わった子供に間接指導を行うことでそれぞれの学習をカバーすることにした。現在は、WEB 上でさまざまな学習問題があり、そこからプリントアウトしたものを使用した。その際、自分で採点できる解答付きのものを採用した。

そして本年度から使えるようになった「ドリルパーク」も併用することでさらに間接指導時の学習スタイルが豊かになり、より多くの問題に取り組めるようになった。

大きな数		名前
○大きな数の計算をしましょう。		
(1) 6003 - 394	(2) 3003 - 590	(3) 4009 - 894
(4) 8005 - 332	(5) 9008 - 284	(6) 7005 - 462
(7) 3006 - 523	(8) 9001 - 814	(9) 2004 - 724
(10) 1009 - 515	(11) 3003 - 410	(12) 5002 - 790
(13) 9005 - 279	(14) 6008 - 741	(15) 3007 - 924

ここから下↓答えが掲載

答え合わせをしましょう

(1) 6003 - 394 = 5609	(2) 3003 - 590 = 2413	(3) 4009 - 894 = 3115
(4) 8005 - 332 = 7673	(5) 9008 - 284 = 8724	(6) 7005 - 462 = 6543
(7) 3006 - 523 = 2483	(8) 9001 - 814 = 8187	(9) 2004 - 724 = 1280
(10) 1009 - 515 = 494	(11) 3003 - 410 = 2593	(12) 5002 - 790 = 4212
(13) 9005 - 279 = 8726	(14) 6008 - 741 = 5267	(15) 3007 - 924 = 2083



【写真2 ICTの活用】

(2) 「学び合い」に関する【仮説】に基づいた実践

ア 話し合いのスキルアップ

上手な聴き方・話し方

	中学年
聴き方	「〇〇と考えたんだね。」 「私も〇〇さんと同じだよ。」
話し方	「〇〇さんと似ていますが…」 「はじめに、……。次に、……。そして、……。最後に、……。」
ペア・グループ活動	「私の考えと似ているね。」 「理由を教えてください。」 「～について〇〇さんはどう思いますか。」 「〇〇さんの考えを聴きます。〇〇さん、どうぞ。」

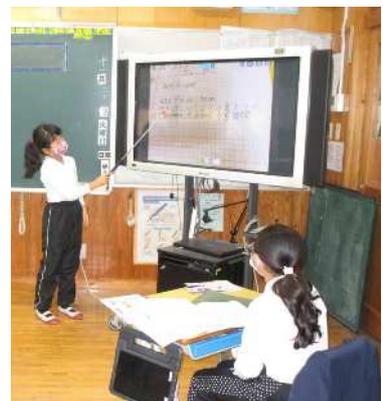
県総合教育センターの資料を参考にし、教師の発問例を作成し壇上に常に設置して授業を進めることにした。また、上手な聴き方・話し方について上・中・下学年、系統性を持たせながら自校化したものを一覧にまとめることで目安を立てた。

そして児童にも「上手な聴き方・話し方」カードを持たせ、学び合いをするときの参考にさせていった。

「ロイロノート」の意見集約は従来の発表ボードと比べ簡単にでき、しかも電子黒板にミラーリングできるのでこちらも大いに活用した。他者の意見を比較検討できるのでよい点に注目させて話し合い、説明の手順や簡単にまとめるコツなども真似させることでスキルを上げていった。

【資料3 聴き方・話し方の手引き】

【資料4 ロイロノートによる意見の集約】

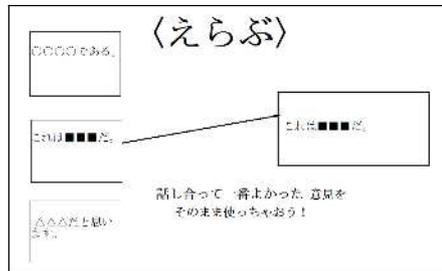


【写真3 発表の様子】

イ ノートを活用した学び合い

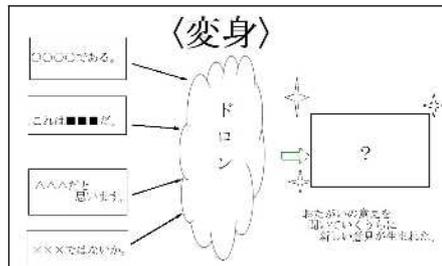
「ロイロノート」の活用だけでなく、学習ノートの活用も大切にし、話し合いの材料となる自分の考えを記入させ、それを持ち寄って意見を交換する学び合いを積極的に行った。

話し合うときの約束として、考えを比べやすいように同じ向きに並べ、全員意見を出すなどして学び合いを展開するようにした。



出てきた意見を集約するキーワードとして「えらぶ」「合体」「変身」などのパネルを提示しながら練り合うようにしていった。

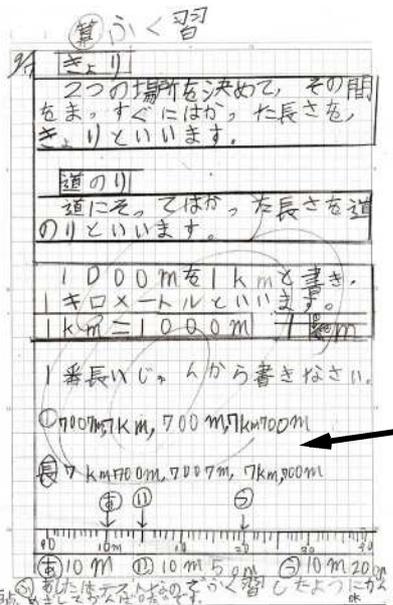
そして決まった意見をタブレットで撮影して「ロイロノート」の提出箱に集めることで時間の短縮と説明のしやすい状況を生み出していった。



【資料5 意見集約のモデルパネル】

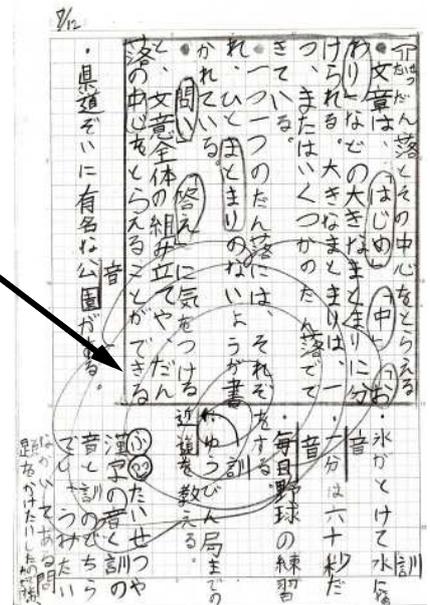
ウ ノート指導を意識した家庭学習の向上

授業の中でのノートづくりが学び合いの中で大きな材料となる。そのための練習の場として家庭学習で使用する宅習ノートでも指導をしていった。絵や図を使うことが「はかせどん」の説明につながることを示唆しながら、宅習ノートの向上を図った。



〈国語の宅習〉
 説明文の組み立ての説明や漢字の音訓表記などの復習を行っており、宅習にもしっかり振り返りを記入している。

〈長さの宅習〉
 大事な用語だけでなく、巻き尺の図を入れた分かりやすい説明を称賛した。



【資料6 宅習ノート 算数の復習】

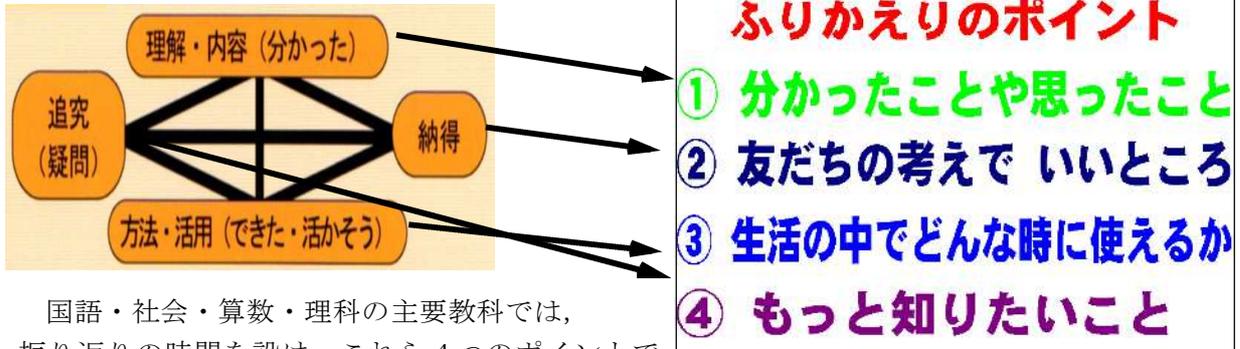
【資料7 宅習ノート 国語の復習】

オリエンテーション的な指導の場をもったり、よいノートの掲示コーナーを設置してみんなで品評したりした。また、まとめ方がうまくできない子供には、掲示コーナーでお手本となるノートをヒントにしながらアドバイスすることもあった。

保護者の協力を得るために学級通信で紹介した。余談ではあるが、このような啓発が夏休みの自由研究に生かされ、クラスの全員が社会あるいは理科で自分のテーマに取り組んで冊子にまとめる記録を残すことができていた。

エ 「振り返り」による締めくくり

振り返りについて大隅学力向上リーフレットを参考に、月野小独自の振り返りのポイントを作成した。大人であれば「ダイヤモンド・サイクル」の4つの観点の関連をつかむことができるが、子供が振り返りがしやすいものにしていくために、「4つの観点の具体」を基本にしながらか月野スタイルの振り返りのポイントにした。

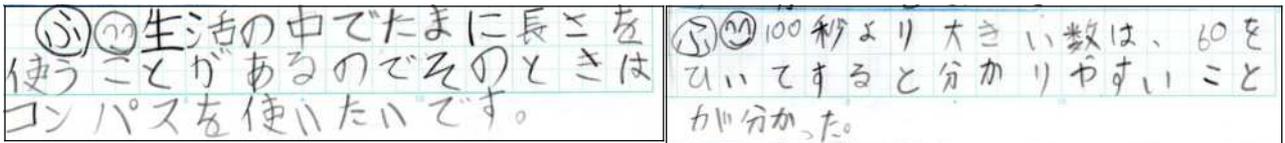


国語・社会・算数・理科の主要教科では、振り返りの時間を設け、これら4つのポイントで簡単に分かりやすく書き、発表させていった。

【資料8 自校化した振り返りのポイント】

学習のまとめと同じことを述べる振り返りもあるが、45分の凝縮として説明しており、ただ聞くだけの授業と異なり能動的に学習に関わっている表れでもあると捉えている。

場合によっては、修飾語を入れてより具体的に説明するようアドバイスして振り返りのさらなる向上も図っている。そしてこの振り返りを互いに伝え合うことで学び合いの力が培われていくと考えているのである。



【資料9 児童の振り返りより】

これらの実践例を展開しながら「学習スタイル」と「学び合い」の仮説を検証していった。

5 成果と課題

まずは子供たちからがんばっていることやできるようになったことについて聞いてみた。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| ○ 計算が速くできるようになった。 | ○ いろいろな問題が解けるようになった。 |
| ○ いろいろな考えを出せるようになった。 | ○ 図を使って説明できるようになった。 |
| ○ たくさん発表できるようになった。 | ○ 友達に教えることが増えた。 |

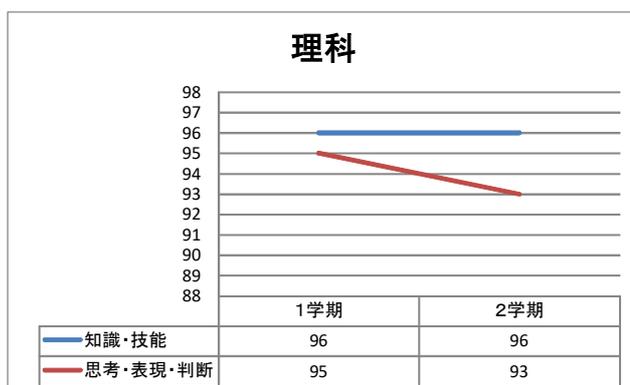
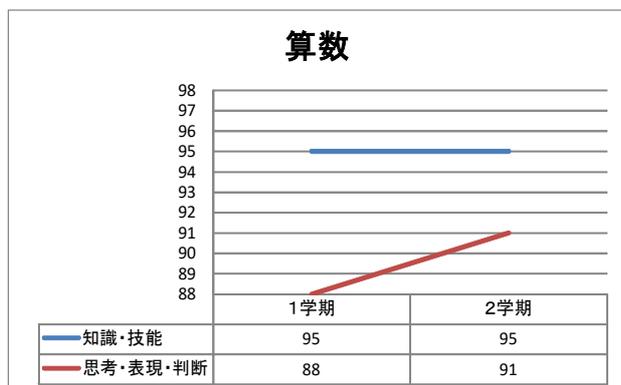
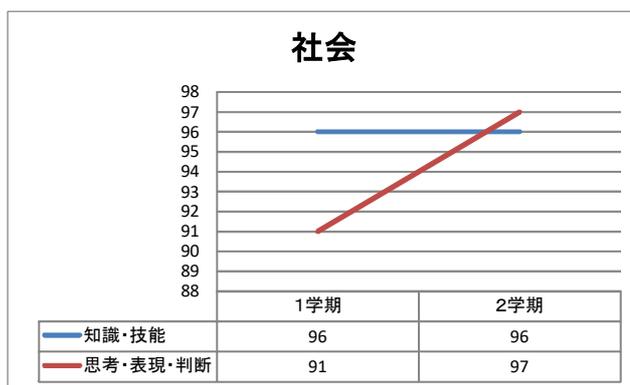
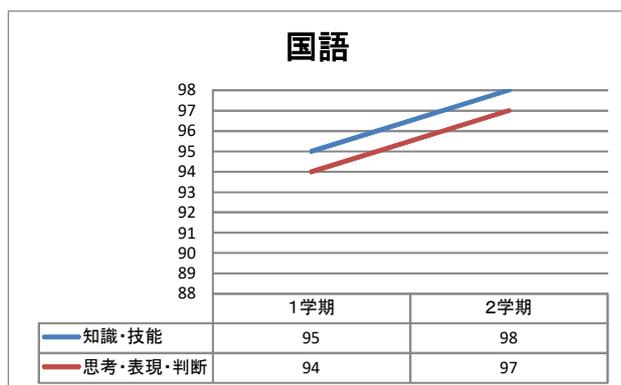
自己肯定感のある回答が多く、手応えを感じさせてくれる好意見が多い。ただし、あくまで子供の目線であるため、担任側の主観的な目を見た成果と課題についてもまとめてみた。

「学習スタイル」に関する【仮説】について	
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の進め方が同じになるようパターン化を心掛けたので、ガイドとしての声掛けが、ほぼ全員できるようになってきた。 ○ 板書の流れが電子黒板まで連動した広がりとなり、子供たちが主体的に参加していく学習をさらに展開できるようになった。 ○ 間接指導時には自分で学習を進める習慣が完全に身に付いた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習に理解の遅い子供は、間接指導の時間の使い方の経験が他の子供より少ない。 ● 個人差があるので、実際の複式学級で機能するか不安はある。

「学び合い」に関する【仮説】について	
成果	○ 発問例や聴き方・話し方の手引を作成したことで、教児共により話し合いをしようとする意識するようになってきた。

成 果	○ 自分の考えをノートに書き，タブレットで報告する一連の作業に慣れ，学び合いが活性化した。
	○ 友達に教える姿が増えてきた。
	○ 自分の考えを各ノートにまとめる際，図や式などを挿入して分かりやすいものにしようと心掛けるようになってきた。
	○ 振り返りが反復になるだけでなく，次時への意欲にもつながっていた。
課 題	● 話し合いに個人差が見られるので，さらなる底上げをしていく必要がある。
	● 互いに学び合い，他者に教える場面で言葉が強くなる時もあるのでしっかり見届けていかなければならない。

以上のようなまとめとなった。しかしこれは自分の主観であるので，最後に各教科の単元テストの1学期と2学期の推移で客観的に成果と課題を捉えてみることにする。より細かく分析するために全体の合計点ではなく，観点別の合計点で見比べてみることにした。



【資料 10 各教科 1学期から2学期への単元テストの推移】

本研究のサブテーマに「学び合い」とあり，そういった視点から「思考・判断・表現」の項目が気になる場所であるが，理科以外は伸びが見られたことは大きな成果としたい。しかし，理科は3年生にとって新しく始まったばかりの教科のため軽視することなく3学期に補充していきたい。

以上のように，子供の主観，担任である自分の主観，客観的な数値データの3つの角度で研究を振り返ってきた。見えてきた成果を今後の自信につなげ，浮かび上がってきた課題を放置することなく改善に転じていきたいと思う。

6 最後に

これで研究の報告を終わりにしたいところであるが，冒頭でも述べたように本校はへき連の研究公開を1月下旬に控えており，自分のクラスは授業を提供することになっている。そういった意味では公開授業の出来・不出来こそが本研究の成果と課題につながってくる。

できることはやってきた。8か月一緒に過ごしてきた子供たちならきっと大丈夫と確信している。発表当日は今まで取り組んできた「学習スタイル」「学び合い」をタブレット等を駆使しながら実践するまでだ。